

九七 多 作

下手な鐵砲も數打ちや中る、といふ諺がある、しかし下手ではいくら多く打つても一つも中らないかもしれない、勸業債券は千枚買つても一枚も當らないことがあらうが、一枚買つても當ることがある、千枚買つて千枚皆當れば蓋上の最上とせねばならぬ。

歌人詩人俳人の歌詩句の作品に於ける、亦實に此理に外ならず、金玉の名句を百千萬と吐くことが出來れば、本懐之れに過ぎないのであるが、悲い哉さうは問屋が卸してくれない、卸すどころか小賣もむつかしい程に名句は出ないのが一般で、たいてい似たり寄つたりの下手の着想に、若干の下手な修辭を變へてみる位のこと、會心の作生涯一首を得れば足れり、と誰やらが豪語したのは、強ち負惜みのみでもあるまい。

詩歌俳に遊ぶ人が、畢生の作品何首何句あつたといふことは、其正確の數を算へ難く、僅に家集遺稿などにて、其大概を推測するに止まり、これとて一千の作品が五百傳はるもあらう

し、一萬の作品が三百に止まるもあるべく、恐らくは作者自身でさへ、其正確の數は算ふることが出来ないのが本當であらう。

作品の多寡が其巧拙又は作者の資格地位とは、全然没交渉なることはいふ迄もなく、且叙上の通り、其實數は到底不詳なのであるから猥りに斷じ難いが、たゞ文獻に傳はるところで相當多作であつた歌人について、若干をこゝに擧げて見よう、俳人には一日に二萬句を吐いたといふ井原西鶴を初めとして、社頭何千句といふやうな、異常な人々を聞くが、歌人にはそんな超人的なのは殆有るまい。

藤原定家と併稱せらるゝ壬生家隆は、其作る所前後六萬首といふ、しかし攝政良經をして今人麿と呼ばしめ、専門歌人中の歌人として聞えた家隆の此數字も、明治天皇の御製十萬餘首の前には顔色が無い、まことに、天皇は其御製の入神の技にあらせらるゝのみならず、單に御作數の多き點のみにて第一人者におはしまし、昭憲皇太后亦御作歌三萬餘首を算へ奉る由である。

釋正徹は藤原定家に私淑し、其家集草根集は十五卷に上り、歌數の多き他に類なしとまで謳はれてゐるが、其數は知るを得ない。

武門にして秀詠あるもの、之を擧ぐれば、武將にして歌壇の棟梁たる細川幽齋はいふまでもなく、近く武家三歌人と呼ばれる、横瀬貞臣・石野廣通・内藤正範や、松平樂翁・井伊直弼の如き限りもないが、其數に至つては、立花鑑寛の一萬二千九百二十五首を、次に本多助賢の一萬首を擧ぐべく、又、蜂須賀齊裕の詠草十一冊歌數約五千二百首、しかもこれは其全部でないといふのが、先年世に見はれ、拙稿「歌人としての阿波宰相」が、先年サンデー毎日に掲載されたのなどにも及ばさねばなるまい。

儒家にして歌人たるもの亦頗る多く、三輪執齋・谷眞潮・脇蘭室・澤村琴所・頼杏坪の如き、數ふるに遑ないが、數に至つては雨森芳洲を逸することが出来ぬ、しかも芳洲は八十歳にして初めて歌道に志し、八十八歳を以て歿する迄に一萬餘首を詠じたのであるから、其精力實に驚嘆に値する、もつともその昔藤原敦頼は、年八十に及びて、毎月京都より徒步住吉神社に詣でて、只管秀歌を得むことを祈願したといふから、是亦其熱誠ぶりに愕かざるを得ぬ。

中島棕隱は儒林中の粹客、兼ねて歌を嗜んだが、百人一首の初句をその儘に置いて、全部雪の歌のみを詠んだ、中々の力作だと思ふとまだ其上がある、僧立綱は同じ百人一首の第一句を採て雪百首を、第三句を採て月百首を第五句を、採て花百首を詠んでゐる、何れも多作でない

とはいへない。

富士谷成章は鴻儒皆川淇園の弟であるが、儒を以ては兄に及ばずといつて、國學に轉向した、號を北邊又層城といひ、斯學の第一座を占むべき人、成章は「しげあや」「なりあきら」と訓まれてゐるが、「なりのぶ」と假名書せるを見たりとの説を聞く、北邊は「きたのべ」と訓む、嘗て兄淇園と清田儵叟と三人集合し、席上百題を出して各五言律を作り、條件は正午から夜の十二時迄といふのであつた、かくて淇園先づ成り儵叟之に次いだが、北邊は未だ筆を離さない、そこで二人が「今日はいつになら遅いではないか」といつたところ、「いや實は早く出來たのだが」と答へて、出したのを見ると、驚くべし一律に一首づゝ和歌を副へてあつた。成章の作歌の縦横に堪能であつたことは、七體七百首の詠があり、これは上古・中古・中季・近昔・弟世・當時の六體に分ち、各時代々々の風を以て詠出し、且之に自創體と稱して自家の風を添へてゐるのであつて、まことに自由自在といはねばならぬ。

與謝野寛氏の先考禮嚴法師には、約三萬首の作があつた、その中六百餘首を寛氏が選抄し歌集の刊行が成つた。桑門の歌人も可なり多いが、近年頻に喧傳さるゝ克讓和尚には七萬首の詠草があつたといふ、人の顔さへ見れば、まづ一つとて歌を詠んださうで、相當な自信

を持つてゐるが、某時大國隆正に歌論を吹掛け、逆に散々捻ぢられて、これは叶はぬと退却したなどの逸話がある。

昭和四年末發行の雜誌「短冊」に、「江澤講修の詩文集二卷と三十餘卷の長歌短歌の稿本が、大阪の某氏の手にある云々」の記事があつた、實は筆者の手に藏置してあるが、其多作驚くばかりで、歌數など幾許に上るか一寸見當もつきかねる、尙外に家藏の詠草に馬詰親音・住友友善・下里延平などのものがあるが、親音の分は講修同様の大括りで、數を算へるだけの勇氣もない、友善・延平亦相當な數である。

千首和歌といふが古來行はれてゐる、口でこそ千首であるが、さて作つて見ればさう簡單に千首は成るまい、況やこれを條件付きで、假令ば題を限るとか、日時を限るとかいふに至つては、難作なること勿論である。餘談ながら畫の方にも狩野永岳・喜多武晴等に千畫といふがあるが、これも若し一々構圖を異にして一日千枚描かうなら大變なことである。千首和歌も一般的の部立に成るものは、爲家・爲相・師兼以下少からず、柳澤吉里の如きも、武將の出を以て、千首和歌を四度詠んでゐる、しかも初度の作は年僅に十二歳、秋の夜長の徒然にものしたといふ、次の千首は十六歳の時、千首に八十九日を費し、次の千首は二十二歳にて五十日を費

し、同年また別に着到千首がある。父吉保は有名なる出羽守で、これにも千首詠があり、吉里十六歳の千首と共に叙覽に入つた。

佐佐木信綱博士の先考弘綱に、一字題から五字題まで各千首づゝ五千首があり、宗良親王・飛鳥井榮雅・大野定子に各千題千首、相川景見に三字題千首あり、相當に拘束されたものであるが、殿村常久の花千首は更に拘束されたもの。一題百首はざらにあり、毫も異とするに足らぬが、一題千首といふは多く類があまるい。一日千首は龔記富士谷成章にあり、梨木祐爲は、安永九年四月二十三日朝六時から夕景六時迄に、同じく千首を詠んだ、近年では原宏平が、明治二十五年の天長節に、奉祝歌一日五百首を詠み、翌年同日には一千首を詠んだ、當日の情景を筆記した小宮陸氏の一文が幸手許にあり、興趣深きものがあるのでこゝに轉載して其風韻を偲ばう。

掛巻も綾に長き吾大君のあれませる今日  
のよき日のことほきに原宏平翁はむかしより例ま  
れなる千歳の數の千歌仕へまつらむとて田中光盛ぬしを奉行に畠山盛章ぬし渡邊長矩ぬし  
を題者に岡本武智近藤藤真信澄谷愛神田廣倉島篤ぬしと共におのれをも筆者と定められてま  
た夜深う設けの席につかれぬ小瓶にさせる菊の香のいとしめやかなる室の正面に頓阿法師

のつくれる柿本の大神の御像を安置しまつり御酒御あかしなと供へ翁は側の文机に倚り奉  
行題者筆者もそれくゝにさための座になみゐてやかて題者の封じ置ける題をとりいつるま  
ゝに飛驒人のうつ墨繩のすみやかによみ出らるゝを筆者は書つけつゝ新年といふより霞た  
ちこのめもはるのうたよみをへらるゝ程に夜はほのくゝと東の山きはより明離るれは皆人  
端近うたちいてゝはるかに九重の天ををろかみまつりつきて春過夏來り郭公の聲なと筆者  
の筆もとりあへす川邊にすゝみするまに昨日こそとおもひし稻葉のそよきもはや秋たちて  
月のうたよみいてらるゝころは正午となりぬれはしはしいこひてまたうたひつゝけられし  
ことはの玉はくさ葉の露とこほれ拾ふいとまもあらしふきすさひちりかさなれる木の葉の  
うへに霜おき雪ふり年の暮といふころ日もくれぬれは戀の山路をふみわけ山をこえ川をわ  
たり松杉茂れる林も過ぎはては清き渚におりたち大御代のうら安の國をうたひまつりて小  
瓶の菊の露のまにいつしか千歳の數の千歌よみをへられければ翁も我らも柿本の大神の大  
前にうなねつきぬきよろこひ聞えあくるほどにいたくふけて子の時ちかうなりにけり明治  
廿六年十一月三日の夜の序となしつる寶積精舎にて小宮陞しるしつ